

---

# 平成 28 年度の野生動物教育プログラムの活動について

About the activity of the wildlife education program of 2016 year.

宮内 亜宜

Aki, Miyauchi

---

## Abstract

At Department of Animal Pharmaceutical Science, we started wildlife education program in FY 2016. In the first half of the year, we conducted a survey method explanation and field survey of mammals, birds, loggerhead turtles etc. In the second half we conducted literature surveys and presentations by students on the theme "About Conservation". As far as the results of the questionnaire are seen, the satisfaction of the students was high, and there were many students who wished to continue the program even from next fiscal year.

## キーワード

アカウミガメ・自動撮影カメラ・フィールドサイン・ムササビ・野生動物・野鳥

## 1：はじめに

九州保健福祉大学動物生命薬科学科では、平成 28 年度から初めての試みとして、野生動物学の体験型実習の野生動物教育プログラムを行った。対象は 1 年次生から 3 年次生で単位にはならない科目として、長期休暇を除いて月に 1 度開催した。参加は希望者のみの形式とした。

## < 1 年間のプログラム内容 >

4 月	プログラム説明
5 月	班分け、アカウミガメ調査について（講義）、アカウミガメ産卵調査（野外実習）
6 月	アカウミガメの生態について（講義）、鳥類の調査について（講義）
7 月	哺乳類調査について（講義）、トラップ捕獲実習
9 月	地図読み、GPS 機器の扱いについて（講義、野外実習）
10 月	自動撮影カメラ調査について（講義、野外実習）、
11 月	行藤宿泊研修：センサーカメラ回収、ムササビ観察、フィールドサイン、植物同定
12 月	グループ学習：保全について①
1 月	グループ学習：保全について②
2 月	発表会：12 月、1 月の調査内容についてのプレゼンテーション

## 2：1年間のプログラム内容について

4月に説明会を開き、参加者の募集を行った。各学年5名以下を予定していたが、予想よりも希望者が多く面談等による人数調整を行った。最終的に参加希望が強かった4年次生1人を含み、1年次生5名、2年次生8名、3年次生6名、4年次生1名の20名での開催となった。



写真1: 仮剥製作りに挑戦する

5月からはアカウミガメの産卵が延岡で始まるため、事前にアカウミガメ産卵調査についての講義を行い、延岡市のアカウミガメ産卵調査を行った。調査日は宮崎県の調査日と合わせ、5月20日から8月5日までの月・水・金曜日の夜間に行った。各調査は2～3名ごとに行い、初年度ということもあり全ての日程に教員が同行した。結果として、16ヶ所の産卵巣と2ヶ所の戻り跡を確認し、実際にアカウミガメの産

卵現場、孵化現場に立ち会うこともできた。

6月は鳥類調査、7月は哺乳類調査について講義を行い、7月には実際にシャーマントラップを用いた小型哺乳類の捕獲実習も行った。捕獲は学内の敷地内で行い、学生ごとに2トラップずつ設置したが、捕獲できたのはアカネズミ1匹のみであった。捕獲個体は仮剥製作製を行った。

9月は地図読みとGPS機器の取扱について講義と野外実習を行った。野外には地図上のポイントに事前に自動撮影カメラを仕掛けて置き、それを班ごとに回収させた。大学周辺の里山にポイントを設定したが、大学周辺の里山は予想よりも立木が密で、歩きづらく、学生には困難な場所であった。

10月は自動撮影カメラについての講義を行い、実際にカメラの設置を行った。設置場所は1ヶ月後の研修で用いる行滕少年自然の家の敷地内とした。

11月は行滕少年自然の家を利用して、1泊2日の宿泊研修を行った。1日目は自動撮影カメラの回収を行い、撮影された動物の確認を行った。ニホンジカやタヌキ、テンの姿が確認された。また、翌日のフィールドサイン調査説明を講義形式で行った。夜間はムササビの観察を行い、あらかじめ確認してあった樹洞の前で、ムササビが夜間出ていくのを確認した。ムササビは周辺に多く生息しており、夜間に周囲の樹をライトで照らすと多数の個体を確認することができた。2日目は行滕山周辺の森林内でのフィールドサインを確認した。シカの足跡、食痕、糞の他にイタチの糞、イノシシの足跡やぬた場を確認することができた。フィールドサイン調査の時に、各自興味のある植物の葉を回収し、午後からは大学に戻り、植物の同定作業を行った。

12月と1月は「保全について」という題目で図書館の図書とインターネットを活用して各班で調査学習をし、2月の発表に向けてのプレゼンテーションの

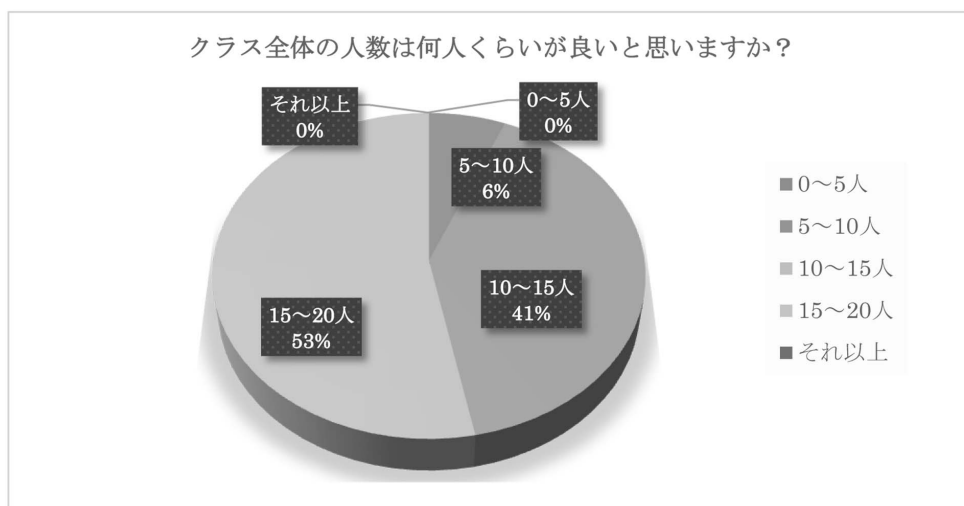
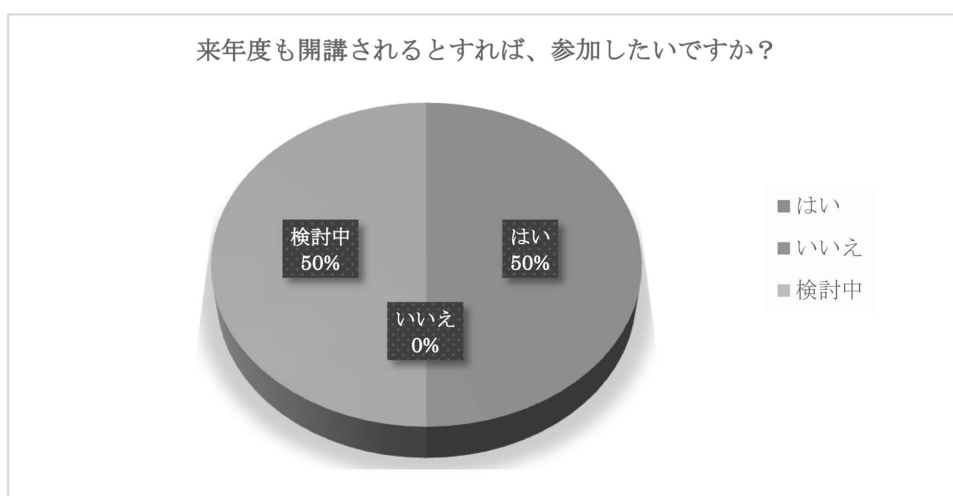
作成を行った。

2月は各班で調査した内容の発表会を開催し、質疑応答を行った。4班体制で、1班から「山に生息する哺乳類の保全」、「海辺の生き物の保全」、「延岡に生息する野鳥について」、「日本に生息する特大の鳥類」という題目の発表であった。最後に1年間のプログラムについてのアンケート調査を行い、来年度に向けての改善点の考察に活用した。



写真2: 図書館で調査結果をまとめる

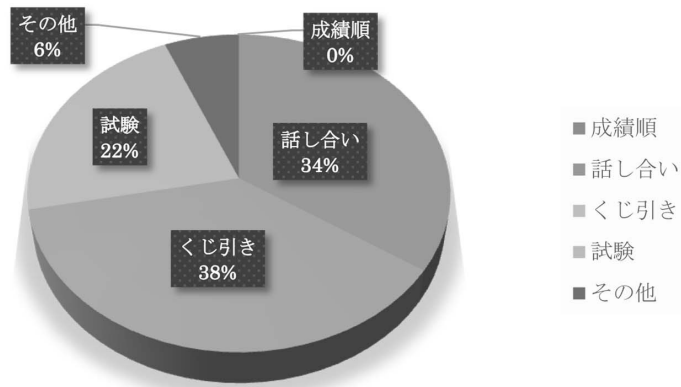
### <アンケート結果>



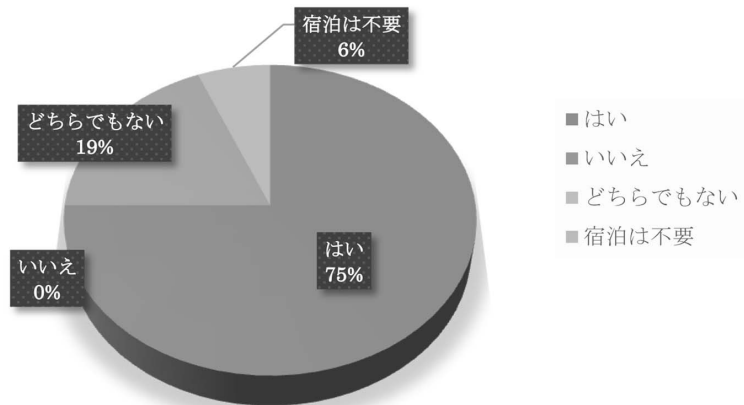
### 3: アンケート結果について

今年度、試験的に開催した野生動物教育プログラムであるが、来年度以降も継続するべきであるか、どのような内容にするべきであるかを検討するために受講生を対象にアンケート調査を行った。アンケートは学年のみ記入の無記名で行った。

希望者が多いときの選別はどのようにするのが良いと思いますか？



行滕宿泊研修に来年度も参加したいですか？



「来年度も開講されるとすれば、参加したいか？」という問いに対しては、検討中を含めると全ての学生が参加を考えていた。内容についての自由記載欄には、今年度とは違う内容を求める声が数人に見られたが、それぞれが興味のある内容について、もう一度やりたい、詳しくやりたいという意見が多く見られた。この結果を考えると、今年度のプログラムの内容については概ね満足している学生が多いように思えた。しかし、本プログラムは参加継続の意思がなくなった段階で放棄可能としており、実際に2人の学生が途中放棄をしている。残った学生に対してのアンケートであったため、継続を考えているのは当然であるのかもしれない。

「クラスの人数は何人くらいが良いと思うか？」という問いに対しては、今年度と同じ15～20人が妥当とする回答が多かったが、10～15人と答える学生も多く見られた。それ以外の回答は少なかった。教員の人数が2人であることを考えると課外実習を行うのは20名が限界であったため、来年度も同じくらいの人数を限度に考えたい。

「希望者が多いときの選別はどうするのが良いか？」という問いに対しては、



写真3: 産卵後のアカウミガメを見送る

あった。成績で決めるということに同意する学生がいなかったことは、参加希望者に成績上位者が多かったことを考えると意外であった。

「行滕宿泊研修を来年度も行ったほうが良いと思うか？」という問いには、ほとんどが行うことを希望しており、一部、どちらでもない、宿泊は必要ないと答える学生が見られた。今年度は人工保育しているムササビを施設で見られたことや、夜間に実際のムササビを多数観察できたこともあり、多くの学生の興味を引けたのではないと思われる。教員と学生の予定を合わせる必要があり、日程調整は難しいが、来年度も開催するように検討したい。

#### 4：終わりに

本プログラムはもともと動物に興味がある本学科の学生の進路選択の幅を広げることや学科教育に対する満足度、充実度を向上させることを目的に開催した。その結果、プログラムに参加した学生には概ね満足してもらえたようであり、来年度以降も継続を検討する必要があると思われた。アンケートの結果から、それぞれが興味のある分野について、より詳細な内容を希望していることは感じられたが、一方で、各自が個人的に講義以外の時間で野外活動に行ったり、野外イベントに参加したりというようなことは見られず、学生の能動的な学習活動へは繋がっていないような結果となった。アンケートでも、もっと教えてほしい、実習を増やしてほしいという、教員を頼りにしたものが多く、グループ学習や発表についてはあまり好意的な意見は見られなかった。

これらの結果を踏まえて、来年度以降はより、地元の野鳥の会探鳥会や博物館による観察・調査イベント、各種講演会等へ学生が積極的に参加し、講義の枠を超えて学習できるように、各種イベントや関連団体の紹介や参加方法などを講義に取り入れたいと考えている。また、来年度は経験者がプログラムに参加すると思われるので、調査内容によっては教員が指示をせず、班内で調査計画を立てて実際に調査してもらうという形式の実習も取り入れることができるのではないだろうか。

話し合い、くじ引き、試験で決めるという意見に分かれたが、成績順に決めるという回答を選んだ学生はいなかった。その他の意見として、希望が多い場合は選別するのではなく、それぞれが興味のある講義を受けられるように回数を指定して選ぶようにすれば良いのではないか、という意見が